慶應義塾 医学部新聞
発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線(64996)
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間 1午前9時～午前11時
●電話 (3353)1211（大代表）

平成23年度入学式

医学部117名が入学

平成23年度慶應義塾大学入学式が5月1日、日吉記念館にて執り行われた。先日の東日本大震災や、計画停電による影響で新入生の入学を歓迎する式典は午前中後の2部開催で執り行われ、医学部は文学部、経済学部、総合政策学部、環境情報学部、看護学部、薬学部、通信教育課程とともに、入生代表入学の祝辞、塾長代表祝辞、新入生代表入学の祝辞、塾長ともに、課外活動は非常に大切なものであり、精力的に取り組むよう、清家塾長は式辞に引き続き、壇上の各学部長を一人ずつ紹介した。

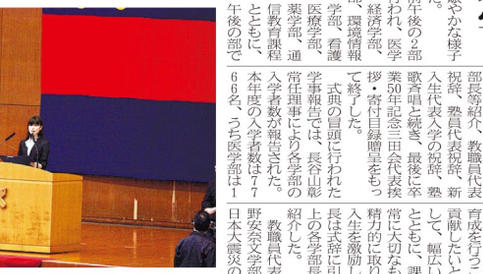
教職員代表祝辞では狭野栄文学部教授が、東日本大震災の年に入学を迎えたことの喜みを感じてほしいと述べた。ご自身の避難所支援の経験を通して、如何なる事態に陥っても、リーダーシップを発揮できるような人間に成長できるよう、期待したいとの激励の言葉があった。

学事報告では、長谷山彰常任理事により各学部の入学者数が報告された。本年度の入学者数は477名、うち医学部は117名、看護医療学部は109名、薬学部は247名と報告された。医学部入学者は前年に比べ4名、前年度は比べ6名の増加であった。

式辞では清家塾長が先の東日本大震災の犠牲者を追悼し、本塾は献身的な支援のみならず、教育機関として優秀な人材育成を行うことで復興に貢献したいと述べた。そして、幅広い学問を学ぶ歌舞伎座の様子、銀杏並木道は希望に満ちた新入生と保護者、新入生の入学を歓迎する塾長の挨拶、寄付目録贈呈をもって終了した。

式典は午前中に行われた学事報告では、長谷山彰常任理事により各学部の入学者数が報告された。

入学式の様子


新入生代表経済学部の春日井茜君

卒後50年を迎えて

さる5月1日、震災の影響で延期されていた塾の入学式が日吉で行われた。我々40回も卒後50年の節目を迎えて入学式に招待された。我々が入学した頃は3000何名だった入学者は、今年は7766名だというから驚くである。

広大な日吉記念館にも一度には入りきらず、午前中後の2部制である。我々は午後組で午後3時からの入学式に列席した。

卒後50年の招待者は約1500名出席したというから大した出席率である。昔の授業の出席率よりも良いのではと思われた。学部から40回生28名が参加した。我々80名の40回卒業の内、20名が他界してしまったので、約5割の出席率である。

本塾に受け継がれる「実学」に励んで欲しいと激励し、式は塾長、教授の祝辞のあと、新入生代表の挨拶順調にすすみ、塾歌唱でお開きとなった。

新入生代表が女性であったのは、未曾有の大惨事の中でも学ぶ機会を与えられたことへの感謝の意を示す様な人柄に比べ、日本社会の復興を広げ、真の友人を作ってほしいと新入生にアドバイスした。

新入生代表入学の辞では経済学部の春日井茜君が、未曾有の大惨事の中でも学ぶ機会を与えられたことへの感謝の意を示す様な人柄に比べ、日本社会の復興を広げ、真の友人を作ってほしいと新入生にアドバイスした。

また、塾員代表として、菊池慶之輔東急券株式会社代表取締役社長は、我々日本国民は現在、大きな困難に直面している。この困難の度に国民が心を一つにして乗り越えて来た過去を鑑み、国民の問題意識と教育水準の高さを挙げられた。学びを考えることに発展させ、多様な人々との交流を通じて視野を広げ、真の友人を作ってほしいと新入生に発展させ、伝統や塾員を受け継ぐ努力をし、精力的に学ぶ決意を語った。

（4年　石井斉宣）

東日本大震災・医療支援

福島県相馬市にて「こころのケアチーム」活動

精神・神経科　加藤　隆（76回）

未曾有の被害がもたらされた東日本大震災からようやく2ヶ月が経とうとしている。各種報道から明らかなように、今回の被害は「想定外」と簡単に表現できるものではない。特に福島県では震災に引き続く津波被害で、未松誠医学部長に聞くべき事故が発生した。ここは1880年代の精神病発症を巡っての議論が、私は95票を獲得し、東京都医師会副会長に当選させていただきました。会長は東京医大出身の野中博氏（浅草医師会）が現職会長の鈴木聰男氏をわずか1票差で退け当選、もう一人の副会長は順天堂出身の尾崎治夫氏（東久留米医師会）が当選しました。みなさまのお力添えのおかげです。ここに御礼申し上げます。

私は、野中氏、尾崎氏とともに「新しい都医師会の創設」に向けて活動し、5つの改革を提唱し、賛同者を増やして邁進にのぞみました。それは、①現場の声や地域医師会の提案を活かした医師会運営、②都民、診療所、病院の参加による医療政策会議の創設、③都民との対話の場の創設、④都民との対話を通じて都民と歩む医療の実現、④地域医療の担い手となる医師の育成とサポート、⑤予防医療への東京からの積極的な取り組み、です。理事運営では三四会会員の林　滋氏（板橋区医師会、内52回）、松本賢治氏（東京都病院協会、外56回）が当選し、その夜に新執行部がスタートしました。

これからの医師会運営では、地区医師会や病院団体と緩り返し議論を行い、理事会、地区医師会長連絡協議会、代議員会、さらには委員会の年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員になります。都民のための医療がよりよきものとなるよう、医師会の体制を強固なものにしていく所存です。

三四会会員のみなさまから多くのご意見を頂戴できれば幸いです。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【略歴】
現在46歳、平成元年医学部卒、平成9年11月東京都荒谷区に近藤医院を開設、平成11年1月～15年4月　渋谷区医師会理事、平成15年4月～21年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員

東京都医師会副会長に就任

近藤　太郎（内68回）

去る4月28日（木）に行われた東京都医師会第272回（臨時）代議員会において、1168人（定数171）の代議員による投票の結果、私は95票を獲得し、東京都医師会副会長に当選させていただきました。会長は東京医大出身の野中博氏（浅草医師会）が現職会長の鈴木聰男氏をわずか1票差で退け当選、もう一人の副会長は順天堂出身の尾崎治夫氏（東久留米医師会）が当選しました。みなさまのお力添えのおかげです。ここに御礼申し上げます。

私は、野中氏、尾崎氏とともに「新しい都医師会の創設」に向けて活動し、5つの改革を提唱し、賛同者を増やして邁進にのぞみました。それは、①現場の声や地域医師会の提案を活かした医師会運営、②都民、診療所、病院の参加による医療政策会議の創設、③都民との対話の場の創設、④都民との対話を通じて都民と歩む医療の実現、④地域医療の担い手となる医師の育成とサポート、⑤予防医療への東京からの積極的な取り組み、です。理事運営では三四会会員の林　滋氏（板橋区医師会、内52回）、松本賢治氏（東京都病院協会、外56回）が当選し、その夜に新執行部がスタートしました。

これからの医師会運営では、地区医師会や病院団体と緩り返し議論を行い、理事会、地区医師会長連絡協議会、代議員会、さらには委員会の年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員になります。

三四会会員のみなさまから多くのご意見を頂戴できれば幸いです。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【略歴】
現在46歳、平成元年医学部卒、平成9年11月東京都荒谷区に近藤医院を開設、平成11年1月～15年4月　渋谷区医師会理事、平成15年4月～21年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員

北里記念式の挙行について

本年は初代本会理事長北里柴三郎先生のハ十年祭にあたり、医学部と三四会との共催によって左記により北里記念式を執り行うことになりました。三四会の皆様方のご列席の程をお願い申し上げます。

記

日時　6月10日（金）午後1時
会場　北里講堂

1、報告並びに承認を求める議案
2、平成22年度業務報告
3、平成22年度決算報告
議案
1、平成23年度学業計画案
2、平成23年度予算案
3、その他

平成23年度慶應義塾大学医学部三四会　会長　比企　能樹

予告

日時　平成23年6月18日（土）午後2時より
会場　新棟11階大会議室

平成23年度慶應義塾大学医学部三四会定例評議員会を左記により開催します。

記

1、報告並びに承認を求める事項
2、平成22年度業務報告
3、平成22年度決算報告
4、財産目録、会計事務処理並びに財産管理、監査報告議案

慶應義塾大学医学部三四会　会長　比企　能樹

鑑往知来

東日本を襲った二千年に一度という大震災・大津波と原発事故　改めて被災された全ての方々に、心よりお見舞い申し上げたい。図らずも「戦後の復興」からの脱却という、「震災後の復興」という言葉が置き換えられていくであろう。

地方在住の私たちが、地震発時は上京中であり、経験の無い大きな揺れを感じ、直後から所謂「帰宅難民」を経験した。そしてその後再度訪れた東京は正に一変、空港・鉄道に限らず駅という駅は薄暗く、エスカレーターも半稼働。夜の町も暗く、人通も極端に少ない。第一、外国人の姿が見あたらない。

大きな船舶がおもちゃのように陸に打ち上げられ、科学立国日本ではあり得ないはずの原発建屋が水素爆発する映像を見るに付け、改めて人類は自然の摂理を乗り越えたわけではないのだなと思い知らされた。そして日本の各界各層の自負は「おごり」となり、全て吹っ飛ばされた。

医療界に於いても、最近ではヒトの生命を扱う「科学医学」がコントロール出来るのではないかと錯覚に陥るが、やはり「命」とはいつまでたっても、進化も生まれ尊いものであると知らなければならない。そしてもう一度、慶應医学部発祥も早くから救援活動に活躍されたことは4月号にも詳細に記されているが、この大災害への対応から感じたことは、医療の中でも、救命救急医療であるが、第一線の救急医療であるが、生活の人生に繋がる「優先の人生を看取る「在宅・緩和ケア」医療がシームレスに連携することこそが、今後の日本の医療提供体制にとって重要な視点ではないかとして、また、変わらなければならないかも知れない。とにかく、我々もそれぞれの立場で日常をドシドシ動いて、息の長い復興支援が出来ればと思って頑張る日本国を信じて！

（当紙編集委員　池端幸彦　59回）

平成23年度 慶應義塾医学部 三四会 評議員会

会場には130人以上の参加者が来場した

平成23年2月10日に厚生労働省で行われた「がん診療連携拠点病院の指定に関する検討会」において、慶應義塾大学病院が、新たに東京都区西部地域がん診療連携拠点病院に指定されました。

病院に指定されたことは、がん診療連携拠点病院としての認定は、今後当院が高度のがん医療を展開していくうえで必須の要件であり、初代腫瘍センター長久保任哲朗教授以来の念願でもありました。

今回の審査において、本院は高度がん医療を提供していることに加え、外来化学療法部門、放射線治療部門、緩和医療部門、がんリハビリテーション部門、低侵襲医療部門からなる「がんリハビリテーション」の取り組みが高く評価されていることが、高く評価されました。また武内病院長のご指導のもと、がんプロフェッショナルプランによる人材育成への積極的な取り組みがなされていること、全国に先導する「がんリハビリテーション」の取り組みが高く評価されていることが、高く評価されました。

今回、東京都からは、地域がん診療連携拠点病院として5病院が推薦され、区西部からは本院、東京医科大学病院、北多摩北部からは公立昭和病院、北多摩南部からは東京都立多摩総合医療センターが認定されました。この結果、2つの都道府県がん診療連携拠点病院、18の地域拠点病院と14の認定病院の計34病院となり、地域のがん診療連携体制を充実させ、さらに都全体のがん医療水準を向上させていくことになります。

区西部医療圏においてすでにがん診療連携拠点病院に指定されていた東京女子医科大学病院に加えて、当院と東京医科大学病院の2つ大学病院が地域がん診療連携拠点病院に指定されたことを機に、平成23年5月7日に本院と東京医科大学病院の共催で、がん診療連携拠点病院指定記念シンポジウムを開催致しました。

シンポジウムは河岡哲男東京医科大学病院長の開会の辞で開始され、佐々木毅慶應義塾大学病院長、近藤太郎東京都医師会副会長、木島富士雄新宿区医師会会長の「ご挨拶」に続き、中川原米俊東京都福祉保健局医療政策部長の「東京都のがん医療対策と区西部医療圏に期待する」ことに、林和彦東京女子医科大学病院化学療法・緩和ケア科教授兼がんセンター病院部門長の「地域がん診療拠点病院としての3年間の総括」、池田徳彦東京医科大学病院呼吸器外科主任教授の「現代のがん診療と相談支援の方向性」、当院からは、高石宮尾腫瘍センター副センター長・専任講師の「慶應義塾大学病院における緩和ケア・ログ本院と東京医科大学病院の共催で、がん診療連携拠点病院指定記念シンポジウムを開催致しました。

シンポジウムは河岡哲男東京医科大学病院長の開会の辞で開始され、佐々木毅慶應義塾大学病院長、近藤太郎東京都医師会副会長、木島富士雄新宿区医師会会長の「ご挨拶」に続き、中川原米俊東京都福祉保健局医療政策部長の「東京都のがん医療対策と区西部医療圏に期待する」ことに、林和彦東京女子医科大学病院化学療法・緩和ケア科教授兼がんセンター病院部門長の「地域がん診療拠点病院としての3年間の総括」、池田徳彦東京医科大学病院呼吸器外科主任教授の「現代のがん診療と相談支援の方向性」、当院からは、高石宮尾腫瘍センター副センター長・専任講師の「慶應義塾大学病院における緩和ケア・ログ・麻酔科専任講師の「こころのケアチーム」活動」の講演が行われ、武田純三病院長の閉会の辞で閉会致しました。

続いて新棟11階シストラン「オアシス」会議室で、未松誠医学部長に開会の挨拶に続き、中川原米俊東京都福祉保健局医療政策部長の「東京都のがん医療対策と区西部医療圏に期待する」ことに、林和彦東京女子医科大学病院化学療法・緩和ケア科教授兼がんセンター病院部門長の「地域がん診療拠点病院としての3年間の総括」、池田徳彦東京医科大学病院呼吸器外科主任教授の「現代のがん診療と相談支援の方向性」、当院からは、高石宮尾腫瘍センター副センター長・専任講師の「慶應義塾大学病院における緩和ケア・ログ・麻酔科専任講師の「こころのケアチーム」活動」の講演が行われ、武田純三病院長の閉会の辞で閉会致しました。

続いて新棟11階シストラン「オアシス」会議室で、未松誠医学部長に開会の挨拶に続き、中川原米俊東京都福祉保健局医療政策部長の「東京都のがん医療対策と区西部医療圏に期待する」ことに、林和彦東京女子医科大学病院化学療法・緩和ケア科教授兼がんセンター病院部門長の「地域がん診療拠点病院としての3年間の総括」、池田徳彦東京医科大学病院呼吸器外科主任教授の「現代のがん診療と相談支援の方向性」、当院からは、高石宮尾腫瘍センター副センター長・専任講師の「慶應義塾大学病院における緩和ケア・ログ・麻酔科専任講師の「こころのケアチーム」活動」の講演が行われ、武田純三病院長の閉会の辞で閉会致しました。

支援内容の前に、相馬市の特殊な背景から述べたい。ここは1880年代の精神病発症を巡っての議論が、私は95票を獲得し、東京都医師会副会長に当選させていただきました。会長は東京医大出身の野中博氏（浅草医師会）が現職会長の鈴木聰男氏をわずか1票差で退け当選、もう一人の副会長は順天堂出身の尾崎治夫氏（東久留米医師会）が当選しました。みなさまのお力添えのおかげです。ここに御礼申し上げます。

私は、野中氏、尾崎氏とともに「新しい都医師会の創設」に向けて活動し、5つの改革を提唱し、賛同者を増やして邁進にのぞみました。それは、①現場の声や地域医師会の提案を活かした医師会運営、②都民、診療所、病院の参加による医療政策会議の創設、③都民との対話の場の創設、④都民との対話を通じて都民と歩む医療の実現、④地域医療の担い手となる医師の育成とサポート、⑤予防医療への東京からの積極的な取り組み、です。理事運営では三四会会員の林　滋氏（板橋区医師会、内52回）、松本賢治氏（東京都病院協会、外56回）が当選し、その夜に新執行部がスタートしました。

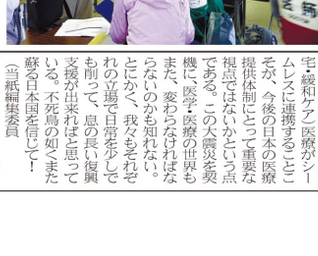
これからの医師会運営では、地区医師会や病院団体と緩り返し議論を行い、理事会、地区医師会長連絡協議会、代議員会、さらには委員会の年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員になります。

三四会会員のみなさまから多くのご意見を頂戴できれば幸いです。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

【略歴】
現在46歳、平成元年医学部卒、平成9年11月東京都荒谷区に近藤医院を開設、平成11年1月～15年4月　渋谷区医師会理事、平成15年4月～21年4月　東京都医師会理事、平成22年4月から日本医師会代議員

会場には130人以上の参加者が来場した

被災地・相馬市の様子


こころのケアにあたるスタッフたち